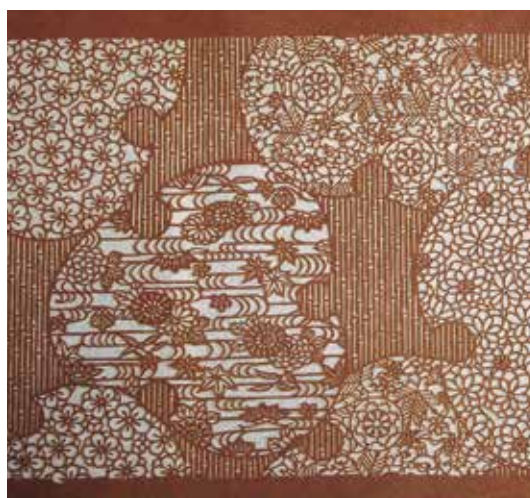


ワークアウト “みえ”



三重の伝統工芸品

特別寄稿

三重県の伝統世界 | 生駒 芳子

活動報告 2018-2019 年度

30・31号

JAPAN
INSTITUTE OF
ARCHITECTS
2020



公益社団法人
日本建築家協会



三重の建築散歩

旧上野市庁舎 1964年 設計 坂倉準三建築研究所

坂倉準三は1960年から1966年にかけて、伊賀市上野公園の麓に「上野市公民館（中央公民館）」「上野市立西小学校校舎及び体育館」「上野市立崇広中学校校舎」「三重県上野庁舎（上野市庁舎北庁舎）」「白鳳公園レストハウス」「上野市庁舎（南庁舎）」の7棟を設計している。いずれも上野城の天守閣を頂く城山の緑を背景に景観との調和を考慮した低層のモダニズム建築である。一人の建築家によってこれだけの公共施設が一定の区域に集中して設計された例は他にはないであろう。その後の経過で現存するのは「旧上野市庁舎」「西小学校体育館」「白鳳公園レストハウス」の3棟のみであるが、これらは高い評価を受けており、2015年6月にドコモ・ジャパンが「旧上野市庁舎」を「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」に選定、さらに2018年12月には日本イコモス国内委員会が現存する坂倉建築を旧城下町の都市景観にあわせた近代建築群の代表例として「日本の20世紀遺産20選」に選定している。

（滝井 利彰）



屋上庭園

アーキテクト
“みえ”

Contents

JAPAN INSTITUTE OF ARCHITECTS
30・31号
2020

表2 三重の建築散歩 旧上野市庁舎

01 巻頭のことば 豊田 由紀美
出口 基樹

02 特集 三重の伝統工芸

04 特別寄稿 三重県の伝統世界 ————— 生駒 芳子
「伊勢神宮の郷は、美しいものづくりのふるさと」

08 伊賀くみひも ————— 松本 正博
伊賀市

10 四日市万古焼 ————— 服部 昌也
四日市市

12 鈴鹿墨 ————— 豊田 由紀美
鈴鹿市

14 伊賀焼 ————— 滝井 利彰
伊賀市

16 伊勢形紙 ————— 豊田 由紀美
鈴鹿市

18 建築文化講演会2019 ————— 山本 覚康
講師：小堀 哲夫「建築と環境と人間」

19 建築文化講演会2020 ————— 木下 誠一
講師：大西 麻貴＋百田 有希「人を愛する建築」

20 活動報告 2018～2019年度

24 三重会員名簿／三重法人協力会員名簿

表3 表紙のことば／編集後記

日本建築家協会（JIA）三重地域会 会長 豊田 由紀美

元号が平成から令和に代わって早くも一年が経とうとしています。

祝福ムードも束の間、昨年末より懸念されていた新型コロナウイルスの世界的な流行により、現在、日本国内では、諸外国からの入国禁止措置がとられ、観光地はもとより、経済にも多大な影響が出ている他、政府より大規模イベントの中止や在宅勤務、小中学校への休校要請、不要不急の外出自粛要請など、大きな社会問題に発展しています。

そうした影響もあって、私たち JIA 三重地域会でも、今年度事業の建築展を延期したり、例会や総会など多数が集まるイベント等への対応に苦慮しているところです。

そんな中、次年度に向けて、各事業や役員会及び例会のあり方を見直し、そのための規約・細則の改定についての協議を重ね、次の総会に提案することに致しました。

ここ数年間においては、継続事業である建築文化講演会や建築ウォッチング以外に、教育・社会活動委員会の活動として、外部講師による環境セミナーや三重短期大学への出前授業などを行い、また研修委員会では、例会

時の CPD 取得を目指した講習会の実施など、「会員増強」を目的とした取り組みを行ってきました。学生や一般の方々の参加を積極的に呼びかけ、JIA の存在を PR し、興味を持っていただくことで新規会員の獲得をめざしています。また、県内の建築 3 団体での合同会議や、行政との協働などの取り組みについては、今後の展開の意義について協議する必要があるものの、JIA 単独ではなく、他団体との協働による利点も多いと考え、継続していきたいと考えております。

さて、話は戻りますが、今回の新型コロナウイルスの感染拡大によって私たちの生活は一変してしまいました。しかしながら、日本が安全安心で、医療も保険制度も他国に比べて充実しており、少なくともパニックや暴動を起こしたりする国民性でないことを確認できたのは良かったと思います。こういう時こそ冷静に、今、自分が何をすべきか、何をすべきではないかを考えたいですね。そして、普段の生活が続けられることが如何に幸せなことだと感謝し、今やれることを一所懸命頑張りたいと思います。

三重地域会 副会長 出口 基樹

「アーキテクトみえ」は二年に一度発刊し、本号 30・31 号は 2018・2019 年号になります。発刊にあたりその間に起こった出来事を振り返ってみました。まず 2018 年には、西日本豪雨があり、多くの方が亡くなる惨事となりました。また、台風 21 号による関西国際空港の冠水も印象的でした。2019 年には、京都アニメーションの放火で 36 人もの命が奪われ、社会を大きく揺るがす事件となりました。また、台風 19 号を含む 3 つの台風が相次いで上陸し、またしても多くの方が亡くなる結果となりました。天災や人災によるものですが、「建築」がうまく機能せずに起こった事件とも言えます。近年の地球では、我々の想定をはるかに上回る自然現象が頻発し、その全てに「建築」が耐えうることは不可能と思える程です。しかし、出来る限りの想定をして備えることはできるのではないのでしょうか。例えば天災に対しては、立地に起因する現象が多くみられますので、敷地を決定する段階から専門家が介入することで、一定の効果が期待できます。人災に対しては、建築基準法の遵守にのみ頼らず、用途に応じて更に踏み込んだ避難・防災計画を

行うことで、対応することもできると思います。我々建築家は当然それらの点に注目して、設計を行う必要があります、そうしなければならないと改めて考えさせられます。しかし、一方では「建築」の異なる側面にもしっかり目を向けなければなりません。前出のような事象・事件が頻発すると、防災・避難に意識がいきがちになりますが、文化・芸術性や社会・経済性もまた、同じくらい大事にしなければなりません。東京オリンピックに向けて、新国立競技場が完成し、国民の期待を集め話題となっています。大阪万博が決定し、関連施設はもとより、周辺の整備も活性化することになります。それらの場面にも「建築」は存在し、人々の注目を集め、営みが行われ、「建築」としての機能を果たすことになります。イベントが終われば、街を形成し、日々の活動の場となり、やがて文化遺産となります。このように、「建築」に求められる役割は多く、また我々の世界において重要な存在であり続けます。我々 JIA 三重としては、今一度初心に戻り、その「建築」に、改めて真摯に取り組み、建築技術・文化の向上に寄与することに努めたいと思います。

特集

三重の
伝統工芸品

三重県では、郷土の風土と歴史の中で育まれ、人々の日常生活と密着して維持されてきた
伝統工芸品 5 品が「国の伝統的工芸品」として指定されています

建築家の仕事はその地域の気候・風土、産業を分析することにも関わっています。
地域に密着した建築家がそれぞれ地元の伝統工芸品を紹介します

● 四日市萬古焼

・四日市市
・菰野町
・朝日町
・川越町
・桑名市
・鈴鹿市

● 鈴鹿墨

・鈴鹿市

● 伊勢形紙

・鈴鹿市

● 伊賀くみひも

・伊賀市
・名張市

● 伊賀焼

・伊賀市
・名張市

経済産業省指定	
伊賀くみひも	昭和 51 年 12 月 15 日
四日市萬古焼	昭和 54 年 1 月 12 日
鈴鹿墨	昭和 55 年 10 月 16 日
伊賀焼	昭和 57 年 11 月 1 日
伊勢形紙	昭和 58 年 4 月 27 日

経済産業大臣指定 伝統的工芸品・伝統的工芸用具

「伝統的工芸品」とは、以下の要件を全て満たし、伝統的工芸品産業の振興に関する法律に基づく経済産業大臣の指定を受けた工芸品のことをいいます。

❶

主として日常生活で使用する工芸品であること。

❷

製造工程のうち、製品の持ち味に大きな影響を与える部分は、手作業が中心であること。

❸

100 年以上の歴史を有し、今日まで継続している伝統的な技術・技法により製造されるものであること。

❹

主たる原材料が原則として 100 年以上継続的に使用されていること。

❺

一定の地域で当該工芸品を製造する事業者がある程度の規模を保ち、地域産業として成立していること。

伝統の「伝」の字と、日本の心を表す赤丸とを組み合わせたデザインで、伝統的工芸品のシンボルマークです。

02 Architect Mie 2019

2019 Architect Mie 03

伊勢神宮の郷は、美しいもののづくりのふるさと

三重県の伝統世界



い こ ま よ し こ
生駒 芳子

三重テラスクリエイティブ・ディレクター、ファッションジャーナリスト、アート・プロデューサー。VOGUE、ELLEの副編集長を経て2008年より「マリ・クレール」の編集長を務め、独立。ファッション、アート、デザインから、社会貢献、クール・ジャパンまで、カルチャーとエシカルを軸とした新世代のライフスタイルを提案。地場産業や伝統産業の開発事業、地域開発など、地域創生に数多く取り組む。2012年より、三重テラスクリエイティブ・ディレクターに就任。2015年よりレクサス匠プロジェクトのアドバイザー。2018年より、伝統工芸をベースにしたファッションとジュエリーのブランド「HIRUME」(<https://www.hirume.jp>)をスタートさせる。日本エシカル推進協議会副会長、レクサス匠プロジェクトアドバイザー、江戸東京きさらし委員、東京2020ブランドアドバイザーグループ委員、東京2020オリンピック・パラリンピックマスコット審査会副座長、WEF(Women's Empowerment in Fashion)理事など。

三重テラス外観（【松阪本舗】の暖簾）

日本全国に数多ある伝統工芸ですが、三重県の伝統工芸を考えると、伊勢神宮の存在は欠かせない。ここ1300年余り、伊勢神宮は20年に一度、式年遷宮を迎え、建物から御装束神宝と呼ばれる神前に祀る御品まで全てを、新たに作り直す。1300年間、その伝統は途切れることなく今に伝えられているが、20年ごとに建て替える意味の一つは、技術の伝承にあると言われている。なるほど、20年ごとに作り直すことで、若い世代に技術が伝承されていくという仕組みだ。

日本人が勤勉に真面目に働くことのルーツをたどると、古事記や日本書記に遡る。そもそも、神道の世界では、神様が天上で働いていて、そのことを写し取るように、地上で人間が働く、という考え方がある。誰も見ていなくてもサボらない、悪いことをしない、いつもお天道様がみているよ、と私たち日本人は育つ過程で教わる。それは、神道の教えに由来する考えと思われる。

丹念に、地道に、忍耐強く作業する。日本の伝統工芸の世界を支えているのは、こうした精神性からくるものではないだろうか？

例えば、三重県の伝統的工芸品の一つである伊勢形紙は、細かい地道な作業から成り立つ世界。超絶技巧と呼ばれるほどの細かい彫眼を見ると、誰もが圧倒され、「これを本当に手で彫るのか？」「今の時代はCGでもできるのではないか？」などと、必ず言われる。が、今もお、手で彫る作業は、しっかりと守り抜かれている。鈴鹿墨は今でも、一つ一つ、手作りで生み出されているし、伊賀くみひもも同じく、丹念な手作業から、緻密に編まれた美しいくみひもを生み出す文化は守り抜かれている。

日本人にとっては、丁寧な仕事を丹念に、勤勉にこなすことこそが、美意識の極みであり生き甲斐であり、豊かさをもたらすもののなのかもしれない。そうした精神性が、伝統工芸のクオリティを支えているのだと思う。そしてその伝統を、現代に、未来に繋ごうとする動きも、見逃せない。スピリットを踏襲しつつ、革新する——そんな動きを追ってみたい。

三重県を代表する伝統的工芸品5つのうち、まずは、伊勢形紙をご紹介します。柿渋で貼り合わせて固めた和紙に、尖った刃先の彫刻刀で、細かい柄や紋様を彫り込んでいく。それは、高度な技術と熟練の技が必要な、実に、地道な作業だ。江戸時代には、鈴鹿の白子で彫られた伊勢形紙が東海道を伝って江

戸に渡り、江戸で染め上げられたのが江戸小紋だ。遠くから見ると無地に見え、近くによると細かい柄が見えるという江戸小紋のマジックは、江戸時代は武士が纏っていた袴に多く使われていた。現在では、江戸小紋は、着物だけではなく、その技術を使ってストールやネクタイなど、モダンなアイテム開発にも展開されている。また、伊勢形紙自体も、染め道具としてだけではなく、照明器具やインテリアアイテム、アクセサリー、雑貨などにも用いられ、その魅力を今に伝えている。

四日市萬古焼の歴史は、江戸時代中期に遡る。桑名の商人、沼波弄山が茶の趣味が高じて、茶器を焼いたのが始まりだという。器の永遠性を願って「萬古不易」と印を押したのが萬古焼の名前の始まりだそう。

萬古焼は急須が有名な陶器の産地であるが、昭和中期に耐熱陶土が四日市で発明されたことにより、土鍋の国産シェア第1位の産地でもある。

長らく生活必需品として匿名的な歴史が続いてきたが、近年では、作家も数多く輩出し、豊かな個性や新たな機能を持った進化系の萬古焼が出現。その存在を未来につなぐ、まさに萬古不易な流れが生まれている。

伊賀焼は、今から約1200年前、天平年間に、伊賀・丸柱の農民が、窯場を作り良質の陶土でふだん使いの雑器を作ったのが始まりと言われている。室町・桃山時代には、茶の道具として重宝され、江戸時代以降は、日用食器類で普及。古琵琶湖層から採れる陶土は、炭化した植物を多く含み、焼成すると細かい穴を含んだ素地となるため、遠赤外線効果も生み、熱を蓄え、美味しい調理が可能となる。そのような特性から土鍋で定評を得てきた伊賀焼だが、ライフスタイルの変化に伴い、今では、ご飯を炊く専門の土鍋や、蒸し鍋、燗製鍋、など、様々な調理を可能にするアイテムが幅広く開発されている。

【伊賀焼】飯櫃ころりん・やまほん陶房（三重グッドデザイン R1 選定）



伊賀くみひもの起源は奈良時代にまで遡り、当初は仏具・神具の紐として発達。角台・丸台・高台を使って、絹糸を主にして、金糸・銀糸を組み込み、繊細に編み上げ、主に、着物の帯締めとして使われてきた。伊賀は、もともと養蚕に適した土地であったこと、そして京都に近い立地から、伊賀くみひものは、明治時代中期以降、産業として発達。現在でも、全国の生産の大半を占める主要な産地だ。現在では、帯締めだけに止まらず、ストラップ、ベルト、ネクタイ、アクセサリーなど、現代のファッションやライフスタイルに沿った開発が進められている。

鈴鹿墨のルーツは、今から 1300 年余り前、鈴鹿の山々で採れた松やにを燃やして煤を取り、そこから墨を作ったことから始まったと言われる。

江戸時代には、諸大名の家紋を書く上質の墨として重宝され、また全国にできた寺子屋からの需要も増え、発展してきたという。現在でも、植物油煙を原材料にして、昔ながらの製法で一つ一つ丁寧に手作りされているため、発色性の良さ、色の深みなど、その品質の良さから、多くの書道家に愛されている。また、紫や青、ピンクなど、カラフルな色が滲み出る新しい墨の開発や、染めや食材に用いるなど、墨の可能性は無限に広げられている。

松阪木綿も、三重の伝統を象徴するものづくりの一つ。天然藍の先染め糸をつかって織りなす縞柄が特徴で、江戸時代には、「粋」が真骨頂のお江戸で、松阪木綿は大流行。江戸の人口が 100 万人の時代に、年間 50 数万反を販売していたというから、その人気ぶりはうかがえる。現在では、着物にとどまらず、ワンピースやコートなどファッションへの応用や、ファッション雑貨、インテリアアイテムなど、幅広い展開を見せている。

尾鷲わっぱの歴史は、元来、山で働く男たちのために作られていたお弁当箱から発している。尾鷲ヒノキを使



【昼活ランチ交流イベント（左）】（平成 30 年 8 月）日本橋ワーカーを対象に四日市萬古焼の土鍋料理でランチ交流

【三重の“宝”トーク（中央上）】（令和元年 6 月）尾鷲わっぱ唯一の職人によるトーク

【江戸小紋×伊勢型紙（中央下）】（令和元年 12 月）伊勢型紙の彫師による実演

【こども真珠学校（右）】（令和元年 8 月）アコヤ貝からの真珠取り出し体験

い、漆をかけて仕上げるという 45 工程全てを手作業で行う技法は、今なお守り抜かれ、一つ一つ丁寧に作られている。100 年を超えても使い続けられるという堅牢さと、天然材ならではの温もりから、今またじわじわとファンを増やしている。大中小のお弁当箱から、トレイ、カップ&ソーサー、ワインクーラーまで、チャレンジングなものづくりが続いている。

三重県では、伝統をふまえながら、機能性、デザイン性に優れた革新的な商品を「三重グッドデザイン（工芸等）」として選定している。

これまで、6 年間で 43 点の商品が選定されていて、今のライフスタイルに沿った伝統工芸品が今後も生まれてくることに期待している。

工芸品ではないが、三重のものづくり、美意識を語る上で、真珠は欠かせない。三重県における真珠養殖は、1893 年、御木本幸吉氏が、実験中のアコヤ貝から半円真珠 5 個を産出し、アコヤ貝による真珠の養殖法を発見したことに始まる。正確に言えば、これは世界で初めての開発であり、ここから養殖真珠の歴史は始まったとも言える。今なお英虞湾を中心に、上質の真珠の養殖は進められており、その名声と評価は揺るぎないものとなっている。ジュエリーの展開に加え、近年では、化粧品や食品などに真珠を素材として用いる開発も進められている。

神々が宿と言われる地にふさわしく、森の幸、山の幸がふんだんにある御食国である三重県はまた、海、山、大地の恵みを、人の手で美しいものへと作りあげる「ものづくり」の大国でもある。この次の三重への旅では、ぜひ、それぞれの地で、これら美しいものづくりの世界に触れていただきたい。

三重への旅の窓口として、平成 25 年 9 月に東京・日本橋にオープンした首都圏営業拠点「三重テラス」がある。

日本橋は、かつて多くの伊勢商人の店が軒を連ねた場所であり、今なお、三重ゆかりの企業が沢山ある。また、日本橋から伊勢神宮を結ぶ東海道、伊勢参宮街道は、江戸時代の旅のゴールデンルートだった。

このような歴史的にも三重との関わりが深い地に設けられた三重テラスには、首都圏、さらには世界とつながる三重の新しい玄関口でありたいという思いが込められている。

三重テラスは 1 階にショップ、レストラン、2 階に

イベントスペースを備えているが、全館に「匠の技」がショールームのように散りばめられている。

正面入口には尾鷲ひのきを使用したファサード、松阪木綿の暖簾を掛け、その内装として、ショップには尾鷲ひのきの什器や組子の天井照明をはじめ、伊勢神宮をイメージした木の格子天井、萬古焼・伊賀焼のタイル、レストランには鈴鹿墨で染めた暖簾や伊勢木綿のカーテン、伊賀くみひものメニューブック、イベントスペースには伊勢型紙の行燈など、三重県が誇る素材や伝統工芸等によって、品格のある空間が構成されている。

また、オープン以来、イベントスペースでは、伝統工芸の世界で活躍している職人さんを招いたトークや実演、展示などのイベントを数多く開催している。ぜひ、三重テラスで伝統工芸品に出会って、触れて、三重の美しいものづくりのスピリットを感じていただきたい。



【伊賀くみひも（左）】envu UNSUNG watch bracelet・松島組細店（三重グッドデザイン H30 選定）

【尾鷲わっぱ（中央）】花見弁当箱・ぬし熊（三重グッドデザイン H29 選定）

【鈴鹿墨（右）】今上天皇の御即位をお祝いするため三重県から献上



三重テラス公式 HP <http://www.mieterrace.jp>



▲複雑な柄を組むことができる“高台”の組紐体験ができる。

伊賀くみひも

伊賀市

松本 正博

伊賀くみひもといえば、地元では“廣澤徳三郎”が有名だが、最近は、メガヒット映画『君の名は』で一躍脚光を浴びたようである。そこで、伊賀と紐の関係について少々時代を遡ってみる。

昭和 39 年名阪国道の工事中、久米山古墳で 4～5 世紀のものとみられる四神鏡の背面に紐が通されたものが発見された。伊賀で発見された古代の“紐”である。また、南北朝時代には、伊賀出身の能楽師“観阿弥”の衣装や面などに組紐が使われていた。

数少ない忍者に関する文献である『萬川集海』には“下げ緒の紐”の記載があり、戦国時代末期には忍者が使っていたことが分かる。徳川時代に入り、藤堂高虎の伊賀入国と共に城下町の形成、武士の居住により武具の自給

体制が確立された。これらは、甲冑の臈用（おどしよう）の組紐である。京・大坂の経済圏にあった伊賀の組紐は、伊賀国内のみならず京・大坂にも販路を求めたことが推察される。江戸時代には、“伊賀の組紐”は産業として実存していた。

この様に、伊賀に於いて組紐が産業として基盤を持つようになったのは、ひとつに、伊賀盆地が原材料の養蚕が盛んであったこと、和装商品の本場京都に近く、気候風土が温度・湿度に敏感な絹糸に適していたこと、交通の便が悪く他に産業が無かったこと、などがあげられる。

しかし、明治の“廃刀令”などによる武家社会の崩壊により、武具・装具類などが不要となり、産業としての組紐は一旦衰退してしまった。そこで登場するのが前述



▲三代目徳三郎氏（廣澤浩一氏）、組紐・組物学会会長



の“廣澤徳三郎”である。彼は明治 35 年、当時組紐の技術が残っていた東京から“江戸組紐”の技術を伊賀に持ち帰り、帯締め、羽織紐等に活用するなどして、伊賀の組紐を再び開花させたのである。

組紐を生業とする私の先輩によれば、「組紐はほとんど一般の家庭で家庭内手工業的に作られてきたので、農家の女性の内職として広がった。あとは、伊賀は忍者の里ということで、秘密を厳守する地域性だったこと。もともと組紐の技術は伏せられていたので、伊賀の文化に合ったと思う」だそう。そういえば、物心ついた頃には私の母も丸台で組紐の内職をしていた記憶がある。以降、伊賀が組紐の産地として大きく発展し、手組紐においては全国生産高の大半を占める様になり、現在でも多くの帯締め、羽織紐が伊賀で生産されている。

戦後はさすがに着物の需要も激減し、伊賀でもそれに伴って 96 軒あった組紐店も現在 25 軒と激減している。バブル崩壊後は特に和服業界は一気に冷え込み、組紐業者も大打撃を受けて、京都・東京でも組紐業者が激減した。そんな中逆に大都市に近く、高品質な手組紐と量産できる機械組のどちらのニーズにも応えられる伊賀に注文が流れてくるようになり、今現在伊賀くみひもは需要と供給のバランスがとれた状態にあると言える。

そこで、“伊賀くみひも”の将来性はどうか？ やはり、高齢化の波は真っ先に来ている様で、前述の先輩によれば、組子さん（組紐の担い手）の平均年齢は 70 歳を超えているとのこと。業界では、組紐教室などを開いて若い人（と言っても 30～50 歳だそうです）をスカウトしているそうですが…なんとか伝統文化を守り続けて欲しいものです。

▼伊賀くみひも中興の祖“廣澤徳三郎工房”





▲萬古まつりの風景

昭和初期の風景▼



四日市萬古焼

四日市市

服部 昌也

私の通っていた海蔵小学校の校歌は♪黒煙はく筒柱
～林のごとく並び立つ♪という歌詞で始まります。この筒柱は煙突のことですが四日市で有名なコンビナートの煙突ではなく、萬古焼の工場の煙突です。四日市萬古の始まりは山中忠左衛門が1853年にこの海蔵地区に窯を開いたことからです。私が小学生の頃、昭和50年前後は輸出も好調で萬古産業は最も繁盛した時期でした。多くの工場が地区のなかにあって、黒く塗られた工場の壁がつづく街並が記憶に残っています。友達の多くが「萬古屋さん」といわれる萬古焼に関わる家で、普段使いの湯飲みをつくる傍ら、展覧会に出す茶碗をつくっている作家さんの家や成形型の型屋さん、日本中に出荷するメーカーや多くの輸出を扱う商社の裕福な家とか、様々な萬古焼産業を身近に感じました。当時は小学校にも窯があり、図工の授業として陶芸作品をつくっていました。従事者が減った現在は学校に窯はなくなり、萬古焼に携わる組合員が出張授業として市内20校を超える小学校に出向いて陶芸指導を続けています。組合員数は、過去30年ほどで1/3程度に減少していますが、現在四日市市・菰野町中心に100社以上の窯元・問屋があり県内の主要な地場産業として続いています。

萬古焼の代表的なものは急須と土鍋です。急須は1979年通商産業大臣により伝統工芸品として指定された「紫泥の急須」です。萬古焼は江戸中期に桑名の豪商・沼波弄山の茶趣味が高じてつくった焼物にいつまでも残るよう「萬古不易」の銘を刻印したことが由来です。急須の紫色の平滑な表情が萬古焼の作風として一般には知られていますが、土の産地ではない萬古焼には特定の色、素材感があり

ません。東海道の宿場町・港など物の集積地だった地の利と、決まった焼物のイメージになった分、形にとらわれず生活習慣の変化や海外からの需要に対応し、売れるものを探し技術を高めていく努力で今に産業として残っています。伝統工芸品の「紫泥の急須」も、鉄分を多く含む土がお茶の味をまろやかにすることと、四日市周辺が全国有数のお茶の産地なこととの結びつきもニーズに合わせて発展していく歴史の一端とも思えます。

工業的で生活に密着したもののづくりとなっていることも知名度が低いことに繋がっていると思います。土鍋のシェアは約80%ですが、県外の人で萬古焼と知って使っている人はごくわずかです。この土鍋も、熱に強く割れない鍋として機能的な特徴が売りで、作風的に差別化した産品ではなく産地性を主張しない一般の工業製品的なものとして流通されている傾向があります。

発色・着色の技術についても焼成温度や土の配合などを研究して他ではできない技術開発をしていますが、同様に産地を表すことなく扱われています。戦後の陶器玩具の製造や欧米の有名企業、ハビタやコンランからの発注で製作した食器など、四日市産とは知られていない製品がたくさんあります。

これまで行政・企業がまとまって産地アピールすることはありませんでしたが、2018年に陶祖・沼波弄山の生誕300年を記念したイベントが行われました。萬古焼を広める活動の始まりで2038年開窯300年まで20年間を「BANKO300th」とし萬古焼の魅力を国内外に発信すべく様々な事業が行われます。

総合プロデューサーは世界的に知名度のある陶芸家内田鋼一氏が務め、国内外からの注目を集めるものとなっています。内田氏はこれまで取上げられることの少なかった生活の密着した萬古焼、その魅力を広めるため自らアーカイブ・ミュージアムつくるなど先んじた活動に尽力しています。

2018年に行われた3つの事業は

・記念誌発刊事業

萬古焼を培った産地・歴史をより知ってもらう記念誌「ここはばんこ焼のまち！」を出版。一般書店で販売。

・魅力展示事業

沼波弄山生誕300年企画展「萬古焼の粹～陶祖 沼波弄山から現在、未来に繋がる萬古焼～」を2018年9月から2019年2月までばんこの里会館にて開催。2700人超の入場者。

・ふれあい事業

萬古焼でつながる地域（桑名市、朝日町、菰野町、四日市市）や来訪者との交流。商社やメーカーで萬古焼を体感してもらう「HELLO！FACTORY」を開催。2018年10月の3日間。

これら事業により、マスコミの取上げが通常の窯業系のみから美術系にも及んだことも新たな広がりであり、新聞紙面上の記事は前年の2倍になったそうです。数的には少ないものの若者の来場者もあり文化伝統の若い世代への発信もできました。また海外からの来場も得られ、展示会の入場者数は一般的な公共施設の展覧会に比べ遜色ない数となりました。萬古焼による地域つながりで、行政毎の隔たりがなくなることも大きな発見となったそうです。事業の費用を三重県、四日市市、菰野町、地元財団・一般寄付などで賄い地元だけで成果を出したことも、今後の活動への力付けとなっています。オープニングイベントに来場した四日市市長、三重県知事と四日市をコンビナートではなく焼物の街としてアピールする思いを共有したそうです。

BANKO300th 始動にあわせ、菰野町の体験イベント「こもガク」での関連イベント、作家協会による展示・萬古焼の器で味わう文化財指定旧家での食事会など、萬古焼と地元文化のアピールするこれまでにない企画が始められました。これらの企画は各団体が個別に行っているとのことで、更なる連携企画に期待が持てます。

日本橋の三重県のアンテナショップ「三重テラス」において萬古焼の企画を3回実施したことや陶祖弄山が移住し窯を設けた「江戸萬古」のゆかり地、墨田区との繋がりをつくる陶芸体験会の開催など東京でも萬古焼を広める活動が進められています。



▲耐熱土鍋

伝七郎での作家協会展▼



海外需要にも日本文化・日本料理への注目の高まりとともに鍋や茶器に需要が見られます。元々鍋料理の文化がある東南アジアでは、各地域の特色に合わせた形状で耐久性と高機能を売りとした鍋の需要に期待が見られます。日本文化へ関心が深いヨーロッパなどに対しては、茶道具についてインターネット上に書き込まれた情報を通じ萬古焼の魅力が愛好家に認められ取引を始めているところがあるようです。これまでとは違った方法、方面での海外との取引に広がりを感じられます。今後もこの歴史の積み重ねの上に、他の地域にはできない開発・市場開拓によって焼物産業が続いていくことを期待しています。

参考文献

「ここはばんこ焼のまち！」 内田鋼一監修・月兎舎

「知られざる萬古焼の世界」 内田鋼一著・誠文堂新光社

「よくわかる四日市萬古焼読本」 萬古陶磁器振興協同組合連合会





▲編み干し乾燥



鈴鹿墨

鈴鹿市

豊田 由紀美

鈴鹿おろしと呼ばれる北西の季節風が乾燥した突風となって鈴鹿の平野部を吹き渡る頃、墨匠がその年の墨作りを始める。墨作りは極寒でしか行われない。室温が上がらないようにその作業所は北向きに建てられている。

まだ暗いうちから作業が始まる。薪をたき、膠を湯煎で溶かし水飴状にする。油煙や松煙などの煤に膠の溶液を混ぜる。香料を加え、足や手で練り合わせて墨玉を作る。何度も入念に捏ねることによって艶が生まれ、質が純化される。

墨玉の温度と粘りを体で感じ取りながら、体重をかけて全身で揉み上げる。そして長年の勘で「ころあい」を決める。実にシンプルで美しい作業だ。

天秤で目方をはかり、練り型に入れ、万力で押えて墨の形をつくる。どの道具も長く使い込まれている。型から取り出した生墨は草木灰を入れた木箱の中で丁寧に何度も灰を入れ替えながら水分を抜いていく。さらによく打った藁で干し柿のように連ねて天井から吊るし、2～4か月乾燥させる。乾燥させた墨に、日向産の大きな蛤の貝殻を利用して磨きかける。そして彩色や箔おきをする。と鈴鹿墨が出来上がる。

鈴鹿墨は膠を溶く井戸水が弱アルカリ性で、擦った墨液が柔らかくさらっとして光沢が良いのが特徴とされている。材料である煤は菜種油や椿油、ごま油や松を燃焼させて採り、膠は牛やシカの皮から抽出する。墨は様々な命を譲り受けてつくられているということだ。

以上は作家にしてケーブルテレビのディレクターである鈴鹿市在住の福島礼子氏の「鈴鹿の空を翔る」から引用させていただいた。

小学生の頃の時間割には、週に一度は習字の授業があった。夏休みと冬休みには、競書会に向けて、一日一枚以上の練習という宿題もあった。競書会というのは、県内の小学生や中学生が夏と冬の2回、与えられた課題を一所懸命練習し、一番出来の良かった作品を出してその成果を競うものである。小学6年生の夏、競書会の清書を教室で行った時、当時の担任の先生が書道の達人で、教え子の卒業生から貰ったという富士山の雪溶水を生徒一人、一人の硯に注いでくれた。そして、皆が無言で持参した墨を磨り始めた。夏の終わり、蟬の鳴き声と皆の墨を磨る音だけが聞こえていた。やがて墨を磨り終えると、先生の合図で清書を始める。清書の用紙は3枚限り。

その中で一番出来の良いものを提出するのだ。墨は磨り方が甘いと薄くなり、力強い文字にならない。墨を磨っている時から勝負だった。1時間ほどの作業中、教室は清々しい墨のにおいに包まれる。この時のにおいこそが、私の墨へのイメージそのものである。遠き昔の記憶に埋もれていたが、鈴鹿墨を調べていくうちに、その光景とにおいが鮮やかに蘇ってきたのだった。

近鉄鼓ヶ浦駅近くの線路沿いに、有限会社 進誠堂がある。現在、唯一、鈴鹿墨の製造・販売を手掛けている会社だ。今回は代表取締役である伊藤晴信氏に話を聞くことが出来た。

1987年生まれの32歳。県外から戻り、父である墨匠伊藤亀堂氏に師事をして10年とのこと。若いが、話ぶりもしっかりしていて、頼もしい後継ぎだと感じた。

鈴鹿墨は墨としては日本で唯一、伝統工芸品に指定されている。伊藤亀堂氏は経済産業大臣賞をはじめ、多くの受賞歴があり、2014年には卓越した技能者表彰「現代の名工」を受賞されている。

しかし、今回驚いたのは、「鈴鹿墨」が伝統工芸品という分野に収まらず、いくつもの新しい挑戦を行っているところだ。墨を使った石鹸やお香などの販売や、皮革を墨で染色し、革靴を製造するなど、国内の企業とのコラボで鈴鹿墨の新たな需要を次々と生み出している。私たちと関係の深いところでは、外壁や内装の板材の塗装に墨を利用することが出来るところか。実際に利用した建築家から、防虫、殺菌の効果があると聞いたことがある。

伝統工芸品が持つ本来の用途を超えた、新しい使われ方を積極的に受け入れることで、時代の波に呑み込まれることなく、受け継がれた技術を後世に残しつつも、産業としての発展をも実現出来るのだと改めて感心させてもらった。

写真提供：進誠堂

▼新元号を記念して製墨した油煙墨





▲長谷園 連房式登り窯（国登録有形文化財）伊賀市丸柱

伊賀焼

伊賀市 滝井 利彰

名阪国道を分かれて伊賀から甲賀へ、「伊賀焼の里」の標識を目当てに信楽方面に向かうと、丸柱の里に着く。煉瓦造りの背の高い煙突が目に入るが、この辺りが多い伊賀焼の窯元が集まる処である。ここには「伊賀焼伝統産業会館」があり、伊賀焼の歴史や特徴などのガイダンスを受けられ、作陶体験もすることができる。伊賀焼のコレクションを拝見できるし、伝統工芸士などの作家作品も手に入れることもできる。

伊賀焼とは、伊賀市北部の横山、丸柱近辺で作られる焼物の総称であるが、すでに鎌倉時代から甕、壺、すり鉢などの日用雑器が生産されていた。その後、室町時代後期から桃山時代にかけて茶の湯、特に佗び茶が盛んになると伊賀の水指や花生などがもてはやされることになった。この頃の焼物は「古伊賀」と言われ、川端康成がノーベル賞受賞の時の記念講演で、「水に濡らして、はじめて目覚めるように、美しい生色を放つ」として伊賀

の花生を絶賛している。さらに江戸時代中期からは日用雑器としての焼物の需要が増え、耐火性の高い伊賀産の土瓶、行平、土鍋などが量産され、現在も窯元に受け継がれている。一度は途絶えた茶陶も藤堂藩主の庇護を受けて江戸時代中期には復活、今もその伝統は若い陶芸家にも継承され、芸術志向の個性的な作品も焼かれ、様々な分野のアーティストと協同の作品展も開催されている。

焼物に使われる粘土は、古琵琶湖層群に堆積した花崗岩が風化してできた粘土で蛙目粘土や木節粘土と呼ばれる耐火性の高いものである。実は伊賀・信楽一体は200から250万年以前には琵琶湖であったことが分かっている。現在、NHKの朝の連続ドラマで信楽が舞台の「スカーレット」が放映されている。スカーレットとは「緋色」を意味し、信楽焼の特徴であるが、伊賀では「火色」と言われ、焼成中粘土に含まれる微量の鉄分と降りかかった少量の灰が器物に表面で発色したものである。伊賀の



▲伊賀焼伝統産業会館

火色は信楽のような柔らかな色とは異なり、極めて高温の焼成のため、よく焼き締まった素地の上に焼き付いた焰そのままの強く艶のある色である。「伊賀の七度焼」とも言われるが、何度も高温で焼き上げるのも伊賀焼の特徴でもあり、強い耐火性を備えている。

「古伊賀」の水指や花入の器壁には、ヘラを使用した波状の文様や格子状の押し文様が刻まれ、一對の「耳」が付く。また整った形にわざと手を加え歪ませた破調の形が特徴で、一つ一つ個性的な美となっている。また器肌は赤松を燃料とした窯で長時間、高温で焼かれることにより降りかかった灰が緑色のビードロ（ガラス状）に変化し、また焦げや火割れが生じる。自然の窯変の結果に見えるものの、実は最初からそうなることを想定して焼かれたもので作為的な造形である。筒井伊賀、藤堂伊賀、遠州伊賀といわれる古陶がそうである。この時代の水指や花生6点が国の重要文化財に指定されており、伊賀耳付水指銘「破袋」や伊賀耳付花生ネ銘「からたち」等が代表作である。

＜筒井伊賀＞豊臣秀吉の家臣、筒井定次が伊賀に城を築き城下町を拓いたのは天正13年（1585）。天正伊賀の乱（織田信長軍と伊賀土豪軍の戦い）を逃れた陶工達を信楽の地続き横山に集め、花生、水指などを焼かせ奨励した。ヘラ目や埴田文のある茶道具や日用雑器の他、窯道具などが焼かれ、茶人古田織部が好んで用いたされている。先述の「破袋」はこの時代のものとされている。



▲伊賀焼展示作品

＜藤堂伊賀＞筒井定次に代わって慶長13年（1608）に伊賀に入府したのは、徳川家康の家臣、藤堂高虎。古田織部とも関係の深かった高虎は、織部失脚のあと茶道具を引継ぎ、二代將軍秀忠を屋敷に招いて茶の湯でもてなしたと記録されている。二代藩主藤堂高次も茶陶伊賀焼に関心が深く、丸柱北部の白土山の粘土を好み、陶工10名を置いて、茶陶を焼かせた。白土山の粘土は「白土」と称し、焼き上がりは中国南京の焼物に似て、表情は柔らかく石の様でもあり土の様でもあり、色白で光沢のあるもので当時では珍しいものであった。

＜遠州伊賀＞小堀遠州は高虎の婿であり、幕府の作事奉行としても活躍し、多くの建築、造園に携わった。一方で將軍家の茶道師範を務めるほどの茶人で、伊賀を含む「遠州七窯」（他に志戸呂、膳所、上野、高取、朝日、赤膚）を拓いて陶工を招いた。藤堂の「白土」を水で精製した粘土（水簸土）を用い、轆轤整形したもので、比較的薄作りで底に糸切りが見られる。また千段巻きといわれる轆轤目やヘラ目、埴田文などの装飾を施したものがある。また器の一部に灰釉（ビードロ）を掛けたものもある。

市内の中心地にあった「伊賀信楽古陶館」は残念ながら現在閉鎖され、奥知コレクションと呼ばれる三重県指定文化財の古陶は、丸柱の「伊賀焼伝統産業会館」と信楽の「MIHO MUSEUM」に移されている。

参考文献
伊賀焼「伊賀の七不思議」 谷本光生著 誠文堂新光社

..... 上野城展示の古陶





伊勢形紙

鈴鹿市

豊田 由紀美

江戸時代、武士は袴の小紋柄を競い、各藩独自の定小紋を決めていた。また、武士だけでなく、庶民も華美を慎む中で江戸好みの粋で品のある小紋に熱い思いを寄せてきた。

細やかな文様を作り出すのは伊勢形紙。それは着物時の染色工程で用いられ、専用の刃物で細やかな文様を掘りぬく技術である。

伊勢形紙は鈴鹿市の白子寺家を中心に江戸時代に大きく発達し、以来その技術を連綿と引き継ぎ、江戸小紋や型友禅などの染めの世界で、全国に確たる地位を築いてきた。

ヨーロッパへも何千枚と輸出され、アールヌーボーの源流とも言われている。

最初の工程は形紙地づくり。美濃紙を柿渋で張り合わせ、天日乾燥させる。室に入れ一週間ほどいぶし、さらに半年から一年ほど寝かしておく。地紙の良し悪しが伊勢形紙の出来を大きく左右する。次に彫刻であるが、四種類の技法がある。地紙6枚を重ね、刃先を前方にして

上下に細かく刻みながら進めていく「突彫り」。曲線や鋭角的な切込みも彫ることができるので友禅模様など絵画的な柄の形紙にも多く用いられる。「錐彫り」は針のように細かい半円形の刃物を地紙にあて、左手の指先で回転させることにより小穴を掘りぬく技法、「道具彫り」は刃物自体が、桜、菊などの花卉や丸・三角・ひし形のように一つの文様に作られており、そのまま一突きで彫りぬく技法をいう。そして突彫りと異なり、刃を手前に引くことにより文様を刻むことで「引彫り」とも呼ばれている「編彫り」である。

いずれの技法も精神の集中だけでも大変なもので、高度な技術を得るためには十年はかかるといわれる修練を必要とする。最終工程として、主に女性によって行われる、形紙の補強のための糸入れという技法がある。上紙と台紙の2枚に剥がした形紙の間に、縦横、斜めに生糸を挟み入れ、再び手早く柿渋で張り合わせ、余分な柿渋を強く息を吹きかけて飛ばし、ゆっくりと乾燥させて補強する。



▲伊勢形紙を使った様々な製品

これら5つの気の遠くなるほどの根気のいる技法によって生み出される伊勢形紙だからこそ、幾何学的な模様でありながら、職人の手技の持つ柔らかさや温かみが感じられるのだと思う。

しかし、この伝統工法は産業として成り立っていないと、伊勢形紙共同組合の林庸正理事長から伺った。高度なIT技術やインクジェットプリンターの普及によって手仕事と見紛うほどの文様柄が作れる上に、日本人の和服の着用がかなり減ったことで染色の版としての形紙の需要がなくなったのが原因だという。

現在は専ら贈答品として利用されることが多いが、作品は二科展などに出品され、芸術品として認められてもいる。ただ、経済的には苦しいとのことだ。

また、住宅の障子や襖に利用することも可能だが、かなり高価なものとなる上に、和室のない住宅も増えているために多くは期待出来ないだろう。他にも照明器具など建築資材として利用が出来ないか試行錯誤されている。

そもそも伊勢形紙はデザインを売っている。そのデザインを使用して染物にして売る染物屋の名前は出ても、形職人の名前は出ない。現在も大手メーカーが壁紙のデザインとして形紙を買っていくらしい。完成した型形を売る以外にデザインそのものを商品にしたり、彫刻技術を使ったヒット商品を生み出せれば、今後の展開もあるのではないかな。

英語版のホームページを作成したり、海外への進出も視野に入れているようだ。

伊勢形紙職人が高齢化も伴ってかなり減少した中で、地方創生支援事業の後継者育成事業として若い女性達がこの職人の世界に入ってきたと伺った。大変喜ばしいことだが、伝統工法の技術の伝承という目的ではなく、その技術を活かして生活が出来る体系をつくるのが何より大切だと感じた。

そのために、私たち建築家に出来ることは何か。真剣に考えたい。

▼伊勢形紙を張り込んだ建具



▼林 庸正 理事長。背面は伊勢形紙を使った襖



「建築と環境と人間」 講師：小堀哲夫

2019年1月19日、三重県津市のアストホールでJIA 三重主催、三重県建築士会共催の建築文化講演会2019が開催された。33回目となる今回の講師は建築家の小堀哲夫氏。2017年に史上初JIA日本建築大賞と日本建築学会賞という2つの権威ある建築賞をダブル受賞したことで建築会に名を轟かせた。東京に事務所を構える小堀氏だが、多忙な中、前日の大阪での業務の後、当講演会のためにそのまま三重県津市にお越しいただいた。

当日の会場は150名ほどの聴衆が席を埋める反響ぶりで、学生の姿も例年より多いようだった。13時30分、JIA 三重の豊田会長、続いて三重県建築士会の森本会長の挨拶の後、小堀氏の講演が始まった。

各々の建築家が体感したものは、固有の価値観となってその作品に大きな影響を及ぼすが、今回の講演会で感じたのは、小堀氏ほど、場の空気を敏感に享受し、それによる心の動きにフォーカスする建築家は多くないだろうということ。冒頭で紹介されたのは岐阜県にある実家の庭から見た風景の写真。のどかな田園が広がる、三重県でもよく見かける風景だ。小堀氏の記憶に色濃く残るのは、少年時代を過ごしたその場所の空気感だと言う。「建築家は建築を創る」これは確かな事実だが、氏が目指すのは建築が創出する空気感によって人間の心情や活動をデザインすること、場が生み出す可能性の設計なのだ。



▲小堀哲夫氏

ROGIC (ROKI Global Innovation Center) (静岡県) 設計の際「今働いている職員が、人間の持つ想像力を最大限に発揮できる空間」

の設計をクライアントから依頼されたと言う。設計前の現地調査の段階で、まだ何もない浜松市天竜区の扇状地を訪れ、トビが滑空する姿を見て「ここに吹く風を捕まえられないか」と小堀氏は考えた。その土地が持つ環境の特性を建築内部に取り込むことで、人間が人間らしく活動できる空間を創造する（この行為を氏は「風を解釈する」という言葉で表現していた）。職員はそこに身を置き、開放された空間の中で其々が交流し、新しい発想が生み出される。「元々その土地が持っているポテンシャルを最大限に生かす。そこは元々素晴らしい場所なのですから」と話す小堀氏の笑顔が印象的だった。

講演では、いくつかの作品を通して自身の設計の進め方について紹介された。例えば研究施設の設計では、ワークショップによって職員全員の意見を汲み上げるという手法。建築を使用する関係者全員で、自ら働く場所を共作する。手法自体は目新しいものではないが、小堀氏はそこに生まれる人と人との交流に重きを置く。建築はあくまでもハードとしての場所を提供するもので、その場所で巻き起こる職員同士の化学反応、「そこから先」をデザインするのが小堀流ワークショップである。実は、講演会に先立ち小堀氏の作品を勉強させていただこうと、私は福井県のNICCAイノベーションセンターを見学させていただいた。この施設も設計当初からワークショップ形式がとられた施設である。当日施設を案内し、色々と話を聞かせていただいた職員の女性に「社屋が現在のように変わったことで働き方に大きく影響が出ましたか」と質問を試みた（実はこれには「実際のところ、



▲実家から見た風景を語る小堀氏

建築主導で職員はそれについて来られていないのでは」という私の疑念が含まれていたのだが。彼女は何の躊躇もなく笑顔で「はい」と答えてくれた。内部空間がオープンになることで職員同士の意見交換が促され、新しい発想が創出されるということ。創造の源泉が立ち話というのが興味深かった。講演終盤、火災により消失した旅館「べにや」(福井県)の再建プロジェクトに関する内容が紹介された。現在進行中のこのプロジェクトでもワークショップを行っている。これはむしろスタッフの気持ちの再建と言えるもの。そこから生まれる人間同士のつながりは、建築完成後のビジネスの成功も含め、プロジェクトを全員の力でまとめ、動かしていく大きな気持ちにつながっていく。

講演の最中、なぜ私は「建築家」小堀哲夫という肩書きに対して少し違和感を持ち始めていた。しかし、講演を聞き終わった時、その理由をはっきりと理解することができたのだ。小堀哲夫は建築の先にある「人間の力」を強く信じる「人間家」というべき人物だったのだ。

著：山本 覚康

「人を愛する建築」 講師：大西麻貴+百田有希

1月18日に大西麻貴氏をお迎えし、「人を愛する建築」と題してご講演いただいた。大西氏は、百田有希氏と共に活躍する新進気鋭の建築家である。当日、百田氏は体調不良で欠席され、大西氏の単独講演となった。会場には約130名の方が集まり、今話題の若手建築家の話が聞けるとあって、学生が半数を超えるなど関心の高さが窺えた。

講演は、中学生の頃に訪れたスペインのサグラダ・ファミリアの話から始められた。一人の建築家が描いた夢を、死後も大勢の人が力を合わせてつくり続け、その様子が街のアイデンティティとなっていることに感動して、建築家の道を志したそうである。続いて、大学時代を過ごした京都の大徳寺について紹介があり、街から寺のアプローチ、建物、庭へと至る経路の豊かな空間を体験して以来、経路を大切に考えるようになったとのことである。

初期作品の「二重螺旋の家」では、路地を引き込んだチューブ状の経路と、地域に開いた経路が重なり、建物外周を螺旋状に巻き上がる。その空間体験をイメージして描いたスケッチは、各階が連続的に表現され、絵巻物をみているようで興味深かった。続く「house H」でも、周囲の道に繋がる外部の立体路地と内部の垂直動線が屋上の茶室で出会う。玄関も7ヶ所あって経路はいっそう複雑化し、住宅スケールに都市や集落を凝縮しているような印象を受けた。さらに、規模の大きな「東根市公益文化施設」のコンペ案では、入口を四方八方に設け、経路を水平方向に展開し、何本もの道が交差したような形をしている。この形に至るまで、関係者が抱く様々な想いをスケッチにして、イメージの共有化を図ったそうである。その表現は、絵本のイラストのようで、人々を夢の世界へと引き込む魅力が感じられた。

「Good Job! センター」では、施主が提示した「違いを認め、違いを大切にする」という言葉



を空間として実現するため、障がいの有無に関わらず、一人ひとりが思い思いに過ごせるよう、多様な居場所を創出している。大きさ、向き、色が異なる壁、階段、家具などの要素を集めて空間を分節しつつ、互いの気配が感じられるように緩やかに繋げている。近作の「多賀町中央公民館」でも、複数の建物からなる近江商人の家を参照して、いくつもの部屋が坪庭を挟みながら雁行して連なり、各所に小さな居場所が散りばめられている。広いパブリック空間の中に、一人でも目的がなくても気軽に過ごせるプライベート空間を設けることは、今後の公共建築のあり方に示唆を与えてくれていると思う。

これらの作品に共通していえるのは、周囲と無関係に自己完結するのではなく、地域や敷地のコンテクストを大切にし、その文脈に応答する形で建築を構想していることであろう。講演でも「建築の中だけに体験があるのではない。だから、インテリア、建築、都市計画、ランドスケープを切り分けずに連続的なものとして捉え、経験全体を考えて建築を構想したい」と語っている。また、全体像を決めてから、部分に落とし込むのではなく、様々な居場所やシーンから発想し、複数の経路によって全体像を紡いでいるように思える。生み出された形態は、一見、複雑な様相をみせるが、その空間に身を置き、体験することではじめて理解できるのであろう。是非、近いうちに訪れたい。

講演自体も、作品のシークエンシャルな空間



と同様に、感動する建築との出会いから、次第に建築の考え方や作品を発展させていくストーリーで構成され、物語のようでもあった。穏やかな口調や独特なスケッチも相まって、時間とともに物語の中に引き込まれ、講演後も心地良い余韻が感じられた。今後、どのような展開をみせるか続編が楽しみである。

大西氏は、中高生の頃から「建築は今、人に愛されているのか」という疑問を抱いてきたという。そして、「人から愛してもらうのではなく、自分や建築が人を愛するという形で建築をつくりたい」と語り、演題を「人に愛される建築」から「人を愛する建築」に変えたそうである。そこには、一人ひとりに想いを込めて建築を創造し、建築を通して人々と幸せを共有したいという強い想いが感じられた。講演の最後には、訪れた高校生たちに向けて、「建築の仕事は、人が生涯を過ごす空間の一つひとつに関わることであり、空間を変えることで人の人生も変わる。すべての建築家が想いを込めてつくれば、世の中はもっと素晴らしいものになるだろう。」と話された。あらためて建築の持つ力と可能性を思い起こさせるメッセージであり、多くの人の心に響いたのではないだろうか。

著：木下 誠一



JIA 環境建築賞 優秀賞 (住宅部門)

4+1 HOUSE

米田 雅樹 | ヨネダ設計舎



今計画では、住居内において人と自然の折り合いをつける調停者として、樹高7メートルのアオダモの木を屋内中心に根付かせた。内部の開口は季節、時間の陽光、方角を意識した計画とし、自然の風、光、雨を屋内に取り込むべく、ガラスを持たないエキスパンドメタルの大開口と、同じくガラスを持たない天窓を設え、屋内環境がアオダモの木と生活する人との折り合いがつく環境的中間領域を計画した。冬場は天井までのペアガラス木製建具で暖房部を区画する。季節にあわせて建築の気積を伸縮させることで生活と風土を応答させた。



JIA 優秀建築選 (100選)

株式会社鈴木辻村会計事務所

森本 雅史 | 森本建築事務所



このたびはJIA優秀建築選(100選)に選定いただき、大変光栄に思います。この建築は、城下町伊賀上野の景観区域に建つオフィス兼住居です。崩れつつある城下町のまち並みや骨格を維持しつつ、現代にも対応した新しい風景をデザインしたいと考えました。景観の連続性から駐車場をオフィスとともに日本瓦の大屋根で覆い、角地に沿うようにL字型に配置。中庭を挟んで奥に住居を計画することでオフィスとの適度な関係性を保ちながら、この地にあった生活スタイルを提案しました。本計画が伊賀上野の城下町景観を取り戻すきっかけになることを祈っています。

活動報告

2018～19年度

2018年度

4月16日(月)
第1回役員会、会計監査
場 所:「はな房」
出席者:正会員14名、個人協力会員1名、法人協力会員4名
【議 事】・2018年度新役員等について
・通常総会(総会資料)について
・講演会について
・委員会報告(総務委員会より)

4月25日(水)
2018年度三重地域会通常総会
場 所:レストラン「東洋軒」
出席者:正会員29名中13名出席、委任状7名 計20名
【議 事】第1号議案2017年度事業報告の承認
第2号議案2017年度事業収支決算報告の承認
【報 告】2018年度新役員等構成についての説明報告
2018年度事業計画についての説明報告
2018年度事業収支予算についての説明報告
【講演会】講演:「みえの防災・減災」
講師:三重県知事 鈴木英敬氏
【懇親会】出席者:16名



5月18日(金)
三重県との災害支援活動協定締結に向けての協議(第1回)
場 所:三重県庁議事堂会議室 出席者:10名(J I A会員5名)
第2回役員会
場 所:三重県総合文化センター男女共同参画センター3階特別会議室
出席者:11名(役員6名)※役員欠席者3名
【議 事】・委員会報告
総務委員会:今年度事業計画について
事業委員会:文化講演会/今年度事業計画・講師候補者の提案
建築ウォッチング/年度事業計画・候補地の提案
研修委員会:今年度の事業計画・年4回の研修会及び視察旅行の提案
広報委員会:今年度の事業計画・支部会報誌の表紙に古い図面を使用(奥野会員・出口会員に提供のお願い)
C P D委員会:環境セミナーのC P Dについて
研究・社会活動委員会:今年度の事業方針について
第1回例会
場 所:三重県総合文化センター男女共同参画センター3階特別会議室
出席者:会員8名、法人協力会員5名
【議 事】・委員会報告
総務委員会:今年度事業計画について
事業委員会:文化講演会/今年度事業計画・講師候補者の提案
建築ウォッチング/今年度事業計画・候補地の提案
研修委員会:今年度の事業計画・年4回の研修会及び視察旅行の提案
広報委員会:今年度の事業計画・支部会報誌の表紙に古い図面を使用(奥野会員・出口会員に提供のお願い)
C P D委員会:環境セミナーのC P Dについて
研究・社会活動委員会:今年度の事業方針について
・法人協力会員情報:法人協定会総会について

6月16日(土)
第3回役員会
場 所:三重大学内レーモンドホール
出席者:9名(役員7名)※役員欠席者2名
【議 事】・委員会報告
総務委員会:三重県との災害支援活動協定締結に向けての協議(第1回)についての報告。協定については三重県とJ I A東海支部との間で行う
事業委員会:文化講演会/講師候補者の選定中、懇親会会場を仮予約
建築ウォッチング/行き先を尾鷲地域に決定
研修委員会:次回研修会をオスモ&エーデル棟名古屋ショールームにて行う
広報委員会:東海支部会報誌「ARCHITECT」について
C P D委員会:環境セミナーのC P D 2単位
研究・社会活動委員会:各部会の今年度事業計画について
第2回例会
場 所:三重大学内レーモンドホール
出席者:会員15名、法人協力会員4名
【議 事】・委員会報告

総務委員会:三重県との災害支援活動協定締結に向けての協議について、協定については三重県とJ I A東海支部との間で行う
事業委員会:文化講演会/講師候補者の選定中、懇親会会場を仮予約
建築ウォッチング/行き先を尾鷲地域に決定
研修委員会:次回研修会をオスモ&エーデル棟名古屋ショールームにて行う
広報委員会:東海支部会報誌「ARCHITECT」について
C P D委員会:環境セミナーのC P D 2単位
研究・社会活動委員会:各部会の今年度事業計画について
J I A三重環境セミナー
場 所:三重大学内レーモンドホール
講 師:末光弘和氏
「風のかたち熱のかたち 建築のかたち」
出席者:会員23名、会員外7名、学生29名



6月25日(月)
三重県との災害支援活動協定締結に向けての協議(第2回)
場 所:三重県庁本庁舎会議室 出席者:9名(J I A会員4名)

7月13日(金)
第3回例会
場 所:オスモ&エーデル棟名古屋ショールーム
出席者:会員7名、法人協力会員5名
【議 事】・委員会報告
総務委員会
事業委員会:文化講演会/講師を小堀哲夫氏に決定
建築ウォッチング/当日工程について
研修委員会:次回以降の研修会について、福島現況視察について
広報委員会:HPについて
C P D委員会:本日の研修会C P D 2単位
研究・社会活動委員会:三重短大の出張授業について
研修会1(建材研修会)
場 所:オスモ&エーデル棟名古屋ショールーム
講 師:大黒義之氏(オスモ&エーデル棟カラーデビジョン・チーフ)
「木と塗装」
出席者:会員7名、法人協力会員5名
暑気払い
場 所:オスモ&エーデル棟名古屋ショールーム
参加者:会員8名、法人協定会委員5名

8月17日(金)
第4回役員会
場 所:三重県総合文化センター生涯学習センター2階小研修室
出席者:8名(役員7名)※役員欠席者2名
【議 事】・委員会報告
総務委員会:三重県との災害支援活動協定締結に向けての協議について
事業委員会:文化講演会/チラシの試作
建築ウォッチング
研修委員会:今後の研修会について
広報委員会
C P D委員会
研究・社会活動委員会:建築展について、三重短大の出張授業について
・今後の役員会等について
・福島現況視察について
・清水一男会員の名誉会員選任について

8月22日(水)
三重県との災害支援活動協定締結に向けての協議(第3回)
場 所:三重県合同ビル会議室 出席者:8名(J I A会員4名)

8月28日(火)、29日(水)
福島視察
場 所:福島県内 参加者:8名



9月10日(月)～14日(金)
アルカシア東京大会 2018
場 所:東京都内 参加者:1名(三重地域会)

9月13日(木)～15日(日)
J I A建築家大会 2018 東京
場 所:東京都内 参加者:3名(三重地域会)

9月21日(金)
第4回例会
場 所:三重県総合文化センター生涯学習センター2階小研修室
出席者:会員12名、法人協力会員5名
【議 事】・委員会報告
総務委員会:三重県との災害支援活動協定締結に向けての協議について
事業委員会:文化講演会/チラシの原案について
建築ウォッチング/建築ウォッチングの案内について)
研修委員会:次回例会時に講演を追加
広報委員会:ARCHITECTについて、アーキテクトみえについて
C P D委員会:本日の報告会C P D 2単位
研究・社会活動委員会:委員会の開催
研修会2(福島視察報告会)
場 所:三重県総合文化センター生涯学習センター2階小研修室
報告者:豊田由紀美会長「福島の現況についての報告」
出席者:会員12名、法人協力会員5名

10月12日(金)
第5回役員会
場 所:三重県総合文化センター生涯学習センター4階小研修室1
出席者:10名(役員6名)※役員欠席者3名
【議 事】・委員会報告
総務委員会:三重県との災害支援活動協定締結に向けての協議について
事業委員会:文化講演会/チラシの印刷・配布について
建築ウォッチング/案内の配布について
研修委員会:本日の講演会について
広報委員会:HPの内容について
C P D委員会:文化講演会2単位、建築展1単位、建築ウォッチング6単位
研究・社会活動委員会:建築展について、三重短大の出張授業について
第5回例会
場 所:三重県総合文化センター生涯学習センター4階小研修室1
出席者:会員12名、法人協力会員8名
【議 事】・委員会報告
総務委員会:三重県との災害支援活動協定締結に向けての協議について
事業委員会:文化講演会/チラシの印刷・配布について
建築ウォッチング/案内の配布について
研修委員会:研修会を計5回/年とする
広報委員会:HPの内容について
C P D委員会:本日の講演会C P D 2単位
研究・社会活動委員会:建築展について、三重短大の出張授業について
研修会3(講演会)
場 所:三重県総合文化センター生涯学習センター4階小研修室1
講 師:森岡茂夫
(熊野くらし工房一級建築士事務所)
「防災はまちづくりの入り口」
出席者:会員12名、法人協力会7名



11月17日(土)
建築ウォッチング
「熊野古道と「にほんの里百選」須賀利の旅」
[1班] 熊野古道の越越峠ウォーク
[2班] 須賀利町見学
尾鷲神社一見世土井邸一尾鷲小学校の順で見学
参加者:正会員11名、準会員1名、法人協力会員3名、一般13名 合計28名



11月19日(月)
第1回 みえの気候風土適応住宅勉強会(建築士会・建築士事務所協会・J I A)
場 所:三重県教育文化会館3階第3会議室
出席者:11名(J I A会員3名)

11月21日(水)
研究・社会活動委員会出張授業
場 所:三重短期大学生生活科学科居住環境コース
J I A三重会員による住宅設計事例紹介 参加者5名

12月5日(水)
研究・社会活動委員会出張授業
場 所:三重短期大学生活科学科居住環境コース
J I A三重会員によるエスキス指導
参加者:4名



12月7日(金)
第6回役員会
場 所:アスト津アストプラザ4階会議室2
出席者:10名(役員7名)※役員欠席者2名
【議 事】・委員会報告
総務委員会:三重県との災害支援活動協定締結に向けての協議について
事業委員会:文化講演会/広報、当日スケジュールについて
建築ウォッチング/事業報告
研修委員会:研修会5ー森羅万象匠塾ーについて
広報委員会:ARCHITECTについて、アーキテクトみえについて
研究・社会活動委員会:三重短大の出張授業について
第6回例会
場 所:アスト津アストプラザ4階会議室2
出席者:会員17名、法人協力会員8名、オブザーバー1名
【議 事】・委員会報告
総務委員会:三重県との災害支援活動協定締結に向けての協議について
事業委員会:文化講演会/広報、当日スケジュールについて
建築ウォッチング/事業報告
研修委員会:研修会5ー森羅万象匠塾ーについて
広報委員会:ARCHITECTについて、アーキテクトみえについて
研究・社会活動委員会:三重短大の出張授業について
研修会4(会員発表会)
場 所:アスト津アストプラザ4階会議室2
発表者:㈱アスカ総合設計 谷川精一会員 ㈱アーキ設計 村山邦夫会員
出席者:会員17名、法人協力会
忘年会
場 所:ごきげんえびす 参加者:会員12名、法人協力会員9名

12月12日(水)
三重県との災害支援活動協定締結に向けての協議(第4回)
場 所:三重県吉田山会館 出席者:12名(J I A会員3名)

1月19日(土)
J I A三重 建築文化講演会 2019(第33回)
共催(一社)三重県建築士会
場 所:アスト津アストプラザ4階アストホール
テーマ:「建築と環境と人間」
講 師:小堀哲夫氏(小堀哲夫建築設計事務所)
参加状況:150名程度
J I A三重建築展
場 所:アスト津アストプラザ4階アストホールホワイエ
出展者:J I A会員12名、会員外6名
合計18名



1月23日(水)
研究・社会活動委員会出張授業
場 所:三重短期大学生生活科学科居住環境コース
最終作品の講評会へJ I A会員4名で参加。

1月29日(火)
第2回 みえの気候風土適応住宅勉強会(建築士会・建築士事務所協会・J I A)
場 所:三重県吉田山会館第302会議室 出席者:8名(J I A会員1名)

2月20日(水)
第7回役員会
場 所:四日市ポートビル2階大会議室
出席者:7名(役員5名)※役員欠席者4名
【議 事】・委員会報告
総務委員会:三重県との災害支援活動協定締結に向けての協議について
事業委員会:文化講演会/事業・収支報告
建築ウォッチング
研修委員会:次年度の事業について
広報委員会:ARCHITECTについて、アーキテクトみえについて
研究・社会活動委員会:事業・収支報告
第7回例会
場 所:四日市ポートビル2階大会議室
出席者:会員10名、法人協力会員8名
【議 事】・委員会報告
総務委員会:三重県との災害支援活動協定締結に向けての協議について
事業委員会:文化講演会/事業・収支報告
建築ウォッチング
研修委員会:次年度事業について
広報委員会:ARCHITECTについて、アーキテクトみえについて
研究・社会活動委員会:事業・収支報告
研修会5(森羅万象匠塾)
場 所:四日市ポートビル2階大会議室
「ドローンを使っの防災活動・建築写真撮影」
講 師:一般社団法人三重県ドローン協会 理事 山田義郎氏
出席者:会員10名、法人協力会員8名、会員外2名

3月15日(金)
第8回役員会
場 所:三重県総合文化センター生涯学習センター2階小研修室
出席者:8名(役員5名)※役員欠席者4名
【議 事】・委員会報告
研究・社会活動委員会:次年度の建築展について
・J I A東海支部会報誌 ARCHITECTについて
・2019年度事業計画について
第8回例会
場 所:三重県総合文化センター生涯学習センター2階小研修室
出席者:会員7名、法人協力会員7名
【議 事】・委員会報告
広報委員会:アーキテクトみえについて
研究・社会活動委員会:建築展の活動報告について
・法人協力会員情報:アイカテック建材㈱担当者の交代
Y K K A P㈱三重支店担当者の交代

□三重地域会 会員数の推移(2019年3月末)
正会員28名、準会員3名、個人協力会員1名、法人協力会員18社

2019年度

4月15日(月)
第1回役員会、会計監査
場 所:「はな房」
出席者:正会員11名、個人協力会員1名、法人協力会員5名
【議 事】
・通常総会(總會資料)について
・講演会について
・委員会報告

4月19日(金)
2019年度三重地域会通常総会
場 所:レストラン「東洋軒」
出席者:正会員28名中15名出席、委任状5名 計20名
【議 事】
第1号議案2018年度事業報告の承認
第2号議案2018年度事業収支決算報告の承認
【報 告】
①2019年度事業計画についての説明報告
②2019年度事業収支予算についての説明報告
③2019年度役員等構成についての説明報告
【講演会】
講 演:「建築文化を次世代に継承するー近現代建築資料館とJIAAでの活動ー」
講 師:棚原 武志 芦原建築設計事務所 文化事業担当(JIAA千代田地域会会員)
【懇親会】 出席者:20名



5月17日(金)
第2回役員会
場 所:三重県総合文化センター男女共同参画センター3階特別会議室
出席者:12名(役員6名)※役員欠席者3名
【議 事】
・委員会報告
総務委員会:今年度事業計画について
事業委員会:文化講演会/今年度事業計画について
建築ウォッチング/今年度事業計画について
建築展
研修委員会:今年度の事業計画について
広報委員会:今年度の事業計画について
研究・社会活動委員会:今年度の事業計画について
第1回例会
場 所:三重県総合文化センター男女共同参画センター3階特別会議室
出席者:会員12名、法人協力会員5名
【議 事】
・委員会報告
総務委員会:今年度事業計画について
事業委員会:文化講演会/今年度事業計画について
建築ウォッチング/今年度事業計画について
建築展
研修委員会:今年度の事業計画について
広報委員会:今年度の事業計画について
研究・社会活動委員会:今年度の事業計画について
・法人協力会員情報:法人協力会総会について

6月12日(水)
第3回役員会
場 所:Web会議 出席者:12名(役員8名)※役員欠席者1名
【議 事】
・委員会報告
事業委員会:文化講演会/講師依頼中、懇親会会場を仮予約
建築ウォッチング/行き先を瀬戸・多治見に決定
建築展/文化講演会との同日開催の調整を行う
研修委員会:次回の研修会を総合資格学院四日市校にて行う
CPD委員会:次回の研修会の申請を行う
研究・社会活動委員会:全体の予算を見直す
・次回以降もWebにて役員会を行う。

6月14日(金)
第3回例会
場 所:アスト津アストプラザ4階会議室2
出席者:会員11名、法人協力会員2名
【議 事】
・委員会報告
事業委員会:文化講演会/講師を大西麻貴氏・百田有希氏に決定
建築ウォッチング/工程計画の報告
建築展/文化講演会とは別日にて行う
研修委員会:今年度の全体計画の決定
CPD委員会:次回研修会1はCPD2単位を申請
研究・社会活動委員会:環境セミナーについて

7月3日(水)
2019年度第1回三重県建築関係三団体会議(建築士会・建築士事務所協会・JIAA)
場 所:アスト津アストプラザ4階会議室2
出席者:12名(JIAA三重役員3名)

7月12日(金)
第3回例会
場 所:総合資格学院四日市校 出席者:会員7名、法人協力会員6名
【議 事】
・委員会報告
事業委員会:文化講演会/タイトル等内容の調整中

建築ウォッチング/予算の調整を行う
建築展/開催場所の選定中
研修委員会:次回以降の研修会について
広報委員会:アーキテクトみえ30・31号特集テーマ「三重の伝統工芸品」
CPD委員会:本日の研修会CPD2単位
研究・社会活動委員会:環境セミナーをレーモンドホールにて
ARUP清野新氏を講師に迎えて行う

研修会1(建材研修会)
場 所:総合資格学院四日市校
内 容:最新法改正による環境整備・受験者の傾向合格率
出席者:会員7名、法人協力会員5名
暑氣払い
場 所:近鉄四日市駅周辺居酒屋
参加者:会員8名、法人協力会委員6名

8月5日(月)
第3回 みえの気候風土適応住宅勉強会(建築士会・建築士事務所協会・JIAA)
場 所:サンワーク津2階第5会議室
出席者:9名(JIAA会員3名)

8月7日(水)
第4回役員会
場所:Web会議 出席者:9名(役員5名)※役員欠席者4名
【議 事】
・委員会報告
総務委員会
事業委員会:文化講演会
建築ウォッチング/予定参加者・参加費の決定
建築展/三重短期大学との共同事業を検討
研修委員会:今後の研修会について
広報委員会:アーキテクトみえについて
研究・社会活動委員会:環境セミナーについて
・今後の役員会等について

9月12日(木)
第4回 みえの気候風土適応住宅勉強会(建築士会・建築士事務所協会・JIAA)
場 所:サンワーク津1階第3会議室 出席者:9名(JIAA会員3名)

9月13日(金)
第4回例会
場 所:三重県総合文化センター生涯学習4階小会議室1
出席者:会員12名、法人協力会員5人、オブザーバー1人
【議 事】
・委員会報告
総務委員会:三重県建築物震後対策推進協議会の報告
事業委員会 文化講演会/チラシの原案について
建築ウォッチング/参加費について
建築展/三重短期大学との共同事業を検討
研修委員会:今後の研修会について
広報委員会:アーキテクトみえの特集の統括を生駒芳子氏に
CPD委員会:本日の研修会はCPD2単位
研究・社会活動委員会:三重短期大学への出張授業について
研修会2(会員発表会)
場 所:三重県総合文化センター生涯学習4階小研修室1
発表者:村林桂会員、川崎貴覚会員
出席者:会員8名、法人協力会員1名

10月17日(木)～19日(土)
JIAA建築家大会 2019 青森
場 所:青森県弘前市
参加者:4名(三重地域会)

10月25日(金)
第5回役員会(中止)

10月25日(金)
第5回例会
場 所:三重県教育文化会館本館3階第4会議室
出席者:会員8名、法人協力会員1名、オブザーバー2名
【議 事】
・委員会報告
総務委員会:三重県との災害支援活動協定締結に向けての協議について
(日程調整中)
事業委員会 文化講演会/チラシの発注について
建築ウォッチング/本日現在での参加者25名
建築展/場所・日程の決定

研修委員会
広報委員会:アーキテクトみえについてスケジュール報告
CPD委員会:本日の研修会についてCPD2単位
研究・社会活動委員会:三重短期大学への出張授業について
研修会3(講演会)
場 所:三重県教育文化会館本館3階第4会議室
講演者 三重大 大井 隆弘氏
「吉田五十八の近代数寄屋住宅」
出席者:会員5名、法人協力会員8名

懇親会
場 所:ごきげんえびす津市駅前店
参加者:会員6名、法人協力会員7名、講師1名、オブザーバー2名



10月30日(水)
2019年度第2回三重県建築関係三団体会議(建築士会・建築士事務所協会・JIAA)
場 所:アスト津アストプラザ4階会議室4
出席者:9名(JIAA三重役員2名)

11月8日(金)
JIAA東海支部持出席役員会
場 所:三重県四日市市内
国登録有形文化財ー伝七邸及び、国重要文化財ー四日市旧港湾施設の見学
四日市コンビナート夜景クルーズ
参加者:東海支部20名、三重地域会10名 計30名



11月9日(土)
建築ウォッチング
「瀬戸・多治見 やきもの三味の旅」
見学先:愛知県陶磁美術館
→瀬戸観光コース→多治見修道院
→セラミックパークMINO
→多治見市モザイクタイルミュージアムの順で見学
参加者:正会員10名、準会員1名、法人協力会員3名、一般10名
合計24名



12月4日(水)
研究・社会活動委員会出張授業
場 所:三重短期大学生生活科学科居住環境コース
1年生住宅課題エスキース JIAA三重会員5名で参加

12月7日(土)
第6回役員会
場 所:三重大学内レーモンドホール
出席者:9名(役員5名)※役員欠席者4名
【議 事】
・委員会報告
事業委員会:文化講演会/当日スケジュールについて
建築ウォッチング
建築展
研修委員会(研修会5ー森羅万象匠塾ーについて)
広報委員会(ARCHITECTについて、アーキテクトみえについて)
CPD委員会(本日の研修会についてCPD2単位)
研究・社会活動委員会(三重短大の出張授業について)
・2020年度事業計画・予算
2021年度発刊予定のアーキテクトみえ発刊費の積立金について

第6回例会
場 所:三重大学内レーモンドホール
出席者:会員11名、法人協力会員1名
【議 事】
・委員会報告
事業委員会:文化講演会/当日スケジュールについて
建築ウォッチング
建築展

研修委員会:研修会5ー森羅万象匠塾ーについて
広報委員会:ARCHITECTについて、アーキテクトみえについて
CPD委員会:本日の研修会についてCPD2単位
研究・社会活動委員会:三重短大の出張授業について
・今後のJIAA三重地域会の各事業について
研修会4(研究・社会活動委員会 環境セミナー 2019)
場 所:三重大学内レーモンドホール
講 師:ARUP 清野 新氏
内 容:「Building Physics in Arup」
出席者:会員13名、法人協力会1名、学生7名

忘年会
場 所:カーザミーヤ
参加者:会員8名、法人協力会員1名



12月12日(水)
研究・社会活動委員会出張授業
場 所:三重短期大学生生活科学科居住環境コース
2年生卒業設計中間講評 JIAA三重会員3名で参加

1月15日(水)
建築文化講演会講師設計建物視察
場 所:滋賀県犬上郡多賀町 多賀町中央公民館 多賀結いの森
参加者:会員3名

1月18日(土)
JIAA三重 建築文化講演会 2020(第34回)
共 催:(一社)三重県建築士会、(一社)三重県建築士事務所協会
場 所:三重県立美術館B1F講堂
テーマ:「人を愛する建築」
講 師:大西麻貴氏(大西麻貴+百田有希/o+h)
参加状況:150名程度

1月22日(水)
研究・社会活動委員会出張授業
場 所:三重短期大学生生活科学科居住環境コース
1年生住宅課題講評会 JIAA三重会員4名で参加。

2月7日(金)
第7回役員会
場 所:三重県総合文化センター生涯学習センター4階小研修室1
出席者:7名(役員6名)※役員欠席者3名
【議 事】
・委員会報告
総務委員会
事業委員会:建築展/建築展の内容について
研修委員会:例会後の森羅万象匠塾の内容説明
広報委員会:アーキテクトみえについて
CPD委員会
研究・社会活動委員会:三重短大出張授業の報告
・2020年度事業計画・予算について:2020年度事業計画・予算の報告
・その他:次年度総会及び第1回役員会の日程調整
第7回例会
場 所:三重県総合文化センター生涯学習センター4階小研修室1
出席者:会員10名、法人協力会員5名、オブザーバー1名
【議 事】
・委員会報告
総務委員会
事業委員会:建築展/建築展の内容について
研修委員会:例会後の森羅万象匠塾の内容説明
広報委員会:アーキテクトみえについて
研究・社会活動委員会:三重短大出張授業の報告
研修会5(森羅万象匠塾)
場 所:三重県総合文化センター生涯学習センター4階小研修室1
「南天にひろがれ宇宙ロマン」
講 師:名古屋大学大学院特任教授 福井 康雄氏
出席者:会員10名、法人協力会員4名、会員外6名



2月17日(月)
第5回 みえの気候風土適応住宅勉強会(建築士会・建築士事務所協会・JIAA)
場 所:サンワーク津1階第6会議室 出席者:9名(JIAA会員2名)

2月18日(火)
2019年度第3回三重県建築関係三団体会議(建築士会・建築士事務所協会・JIAA)
場 所:アスト津アストプラザ4階会議室3
出席者:8名(JIAA三重役員2名)

3月3日(火)
臨時役員会(第5回役員会)の代替え
場 所:アスト津3階三重県民交流センター 交流スペース8
出席者:7名(役員6名)※役員欠席者3名
【議 事】
・三重地域会規則及び運営細則改正について

3月13日(金)
第8回役員会
場 所:アスト津アストプラザ5階研修室C
出席者:8名(役員6名)※役員欠席者3名
【議 事】
・委員会報告
総務委員会
事業委員会:文化講演会/事業報告及び決算報告
建築ウォッチング/事業報告及び決算報告
建築展/事業報告及び決算報告
研修委員会:事業報告及び決算報告
広報委員会:事業報告及び決算報告
CPD委員会
研究・社会活動委員会:事業報告及び決算報告
・JIAA三重地域会規則及び運営細則改定について
・次年度総会時の基調講演会、懇親会は新型コロナウイルス感染拡大に伴い中止。
第8回例会
新型コロナウイルス感染拡大に伴い中止。

□三重地域会 会員数の推移(2020年3月末)
正会員28名、準会員2名、個人協力会員1名、法人協力会員19社

日本建築家協会（JIA）三重会員名簿

氏 名	所属先	TEL	FAX	住 所
幹 事				
豊田 由紀美	Y's 建築設計事務所	059-367-7305	059-367-7306	513-0801 鈴鹿市神戸9丁目24-38 アトレ鈴鹿ラグゼ701号室
出口 基 樹	日新設計(株)	059-227-7421	059-225-7854	514-0038 津市西古河町20番18号
相原 宏 康	Hiro 設計室	0595-96-8175	0595-96-8175	519-0118 亀山市北町8-28-6
森本 雅 史	(株)森本建築事務所	0595-65-2638	0595-66-2639	518-0623 名張市桔梗が丘3番町2街区68-4

北勢地区				
阪 竹 男	(有)阪竹男建築研究所	059-322-5096	059-322-6097	510-0961 四日市市波木町394-1
奥野 美 樹	(有)奥野建築事務所	052-963-0771	052-963-0772	511-0009 桑名市桑名663-17
川崎 貴 覚	川崎建築設計室	059-377-2134	059-377-2092	510-8101 三重郡朝日町縄生663
中村 久	(株)中村建築設計事務所	0594-76-2102	0594-76-8717	511-0257 員弁郡東員町北大社1325-9
久安 典之	久安典之建築研究所	059-359-6678	059-359-6679	510-0086 四日市市諏訪栄町22-3

伊賀地区				
西 出 章	(株)森永建築設計事務所	0595-21-1125	0595-23-9945	518-0873 伊賀市上野丸之内62-2
池澤 邦 仁	池澤アソシエイツ	0595-36-2429	0595-36-2429	518-0813 伊賀市蓮池410
滝井 利 彰	一級建築士事務所タック設計室	0595-23-5092	0595-23-0322	518-0858 伊賀市上野紺屋町3171
中森 博文	まちづくり研究所	0595-65-3401	0595-65-0298	518-0603 名張市西原町2685-1
松本 正 博	(株)上野建築研究所	0595-23-6272	0595-23-6273	518-0801 伊賀市平野見能330-22
森本 昭博	(株)森本建築事務所	0595-65-2638	0595-66-2639	518-0623 名張市桔梗が丘3番町2街区68-4

中勢地区				
山本 覚 康	山本一級建築士事務所	059-225-0757	059-224-1779	514-0815 津市藤方1457-4
木下 誠一	三重短期大学生生活科学科 教授	059-232-4430	059-232-9647	514-0112 津市一身田中野 157
清水 一 男	清水設計事務所	059-227-1854	059-227-2268	514-0004 津市栄町1-63
富岡 義 人	三重大学工学部教授	059-231-9662	059-231-9452	514-8507 津市栗真町屋町1577
平野 信義	アーツ設計	059-227-1405	059-227-1407	514-0007 津市大谷町194-8-1B
村山 邦 夫	(株)アーキ設計	059-225-7020	059-225-5104	514-0041 津市八町3-10-10
山下 和 哉	(株)建築デザイン研究所	059-253-6200	059-253-6201	514-0007 津市大谷町254 エンデバービル4F

松阪地区				
芳 賀 信 次	HAGA 総合設計	0598-21-5511	0598-21-5512	515-0064 松阪市五反田町3-1130-8
伊 藤 達 也	一級建築士事務所設計工房NEXT	0598-30-5546	0598-30-5546	515-2324 松阪市嬉野町1487-15
加藤 幸 範	プラス設計室	0598-42-5363	0598-42-8388	515-2321 松阪市嬉野中川町1361-1
谷川 精 一	(株)アスカ総合設計	0598-58-3260	0598-58-3264	515-0845 松阪市伊勢寺町590-4
村 林 桂	村林桂建築設計事務所	0598-30-6336	0598-30-6337	515-0815 松阪市西町2474

伊勢地区				
高 橋 徹	(有)高橋徹都市建築設計工房	0596-27-0455	0596-23-6645	516-0009 伊勢市河崎2丁目27-34

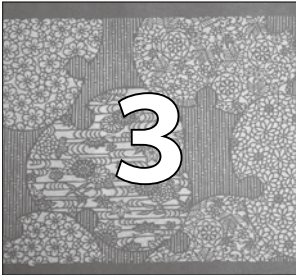
準会員				
豊田 直 樹	Y's 建築設計事務所	059-367-7305	059-367-7306	513-0801 鈴鹿市神戸9丁目24-38 アトレ鈴鹿ラグゼ701号室
米田 雅 樹	一級建築士事務所 ヨネダ設計舎	0598-67-5948	0598-67-5441	515-0029 松阪市西野々町28-2

個人協力会員				
服 部 昌 也	株式会社 八武組	059-331-3030	059-331-3856	510-0815 四日市市野田1丁目2-44

日本建築家協会（JIA）三重法人協力会員名簿

法人協力会員 会社名	TEL	FAX	住 所
株式会社 L I X I L	059-238-5011	059-238-5030	514-0816 三重県津市高茶屋小森上野町1109-1
三晃金属工業株式会社	059-245-6456	059-245-6460	510-0308 三重県津市河芸町中瀬232-1
株式会社 タフ	052-408-2258	052-401-1778	452-0962 愛知県清須市春日江先18
オスモ&エーデル株式会社	052-253-9221	052-253-9226	460-0002 愛知県名古屋市中区丸の内3丁目20-9 三晃社ビル4F
コイズミ照明株式会社	059-380-3711	059-388-3511	510-0226 三重県鈴鹿市岸岡町3747
有限会社 伊勢地撰	0596-38-1688	0596-38-1588	515-0504 三重県伊勢市磯町1252
有限会社 かめの森	0598-42-8095	0598-42-8096	515-2334 三重県松阪市嬉野黒野町1819
ルウエ	059-345-0523	059-345-0624	510-0951 三重県四日市市小古曾東三丁目7-27
TOTO 株式会社	052-308-4705	052-308-5646	514-1113 三重県津市久居野村町420-10
アイカテック建材株式会社	052-757-5177	052-757-5192	464-0821 愛知県名古屋千種区末盛通2丁目1番地1
株式会社名阪造園	059-333-1066	059-333-2612	510-0815 三重県四日市市野田2-5-23
株式会社アイチ金属	052-909-5600	052-909-5610	462-0011 愛知県名古屋市北区五反田町77番地
有限会社 東海テクノ	052-485-6205	052-485-6206	454-0981 愛知県名古屋市中川区吉津3丁目3007
総合資格学院 四日市校	059-359-0711	059-359-0712	510-0075 三重県四日市市安島1-2-24 TKビル4F
株式会社 TJM デザイン 住設事業部	052-781-7070	052-781-7780	464-0026 愛知県名古屋千種区井上町13-3
株式会社 ミヤムラ	059-245-1515	059-245-1735	510-0303 三重県津市河芸町東千里1019-2
株式会社 サンコー	052-226-1268	059-226-1258	514-0833 三重県津市西阿漕町岩田19番地
YKK AP 株式会社 中部支社	059-224-1521	059-226-0953	460-0008 三重県津市栄町1-840 大同生命・瀧澤ビル3階
(株)建築資料研究社 / 日建学院 三重支店	059-349-0005	059-349-0006	510-0885 三重県四日市市日永3丁目2-30

表 紙 説 明



① 四日市萬古焼

紫泥急須 昭和時代

② 伊賀くみひも

廣澤徳三郎工房

③ 伊勢形紙

伊勢形紙協同組合

④ 鈴鹿墨

進誠堂

⑤ 伊賀焼

古伊賀水指 銘「破袋」

重文 五島美術館蔵

(服部昌也)

アーキテクトみえ 30・31号

発 行 日 2020年3月31日

発行責任者 豊田 由紀美

編集責任者 服部 昌也

編 集 三重地域会広報委員会

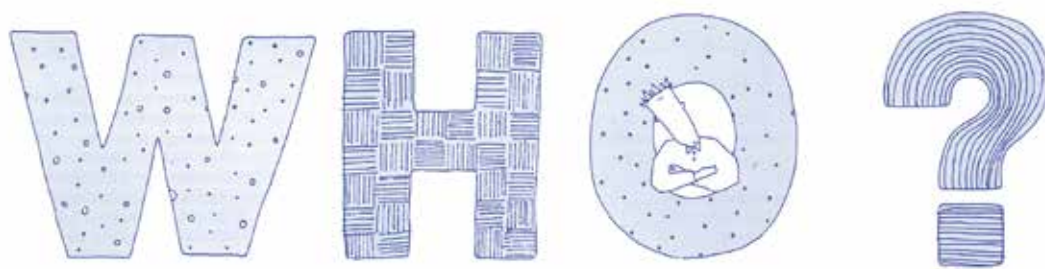
発 行 者 公益社団法人日本建築家協会 東海支部三重地域会

〒513-0801 鈴鹿市神戸9丁目24-38 701

TEL：059-367-7305

●表紙題字／石川紫水（書家・愛知県知多市在住）

※無断転写を禁ず



「建築家って、何をする人?」と
あらためて聞かれると、その職業名は知っていても実際にどんな仕事をするのかは、意外にご存知ないもの。
「設計図を描く人」「大工さんに指示する人」など
部分的なイメージを持っていても本当の姿はなかなか伝わっていないようです。
「えっ、こんなことまでしてくれるの?」と驚かれるほど、さまざまなことをする建築家について
新しい目を向けてください。

建築家は
建物の
お医者さんです



建築家は
建物の
財務マンです



建築家は
建物の
法律コンサルタントです



建築家は
建物の
演出家です



建築家は
建物づくりの
キャプテンです



建築家は
環境価値の
創造者です



建築家は
一生の
パートナーです



JIAは
そんな建築家の
組織です



6月15日は建築の日



公益社団法人日本建築家協会東海支部
三重地域会

<http://www.jia-mie.com>

